能登に春を呼ぶ

祭りと行事

アマメハギ（秋吉・清真・河ケ谷）

国指定無形民俗文化財の伝統行事「アマメハギ」は秋吉地区で2月3日に行われた。「アマメ」とは、いろりやこたつにあたった所にできる「火だこ」。立春前夜、子どもたちが鬼に扮し、冬の間に怠けてできた「アマメ」を剥ぐと脅しながら各家々を巡って春への備えを人々に伝える。

鬼は子どもたちが担う。能登町のアマメハギに見られる特徴の一つ。今年、河ケ谷で子どもが不在になったため、大人がその役を務め、行事の保存にあたった。

【写真右】衣装を身につけ出発。「前垂れ」は秋吉公民館で今年新調した。【下】いろりの周りを回る子どもたち。（以上秋吉）
【右上】玄関先に現れた小さな鬼たち。（清真）

十七夜祭り（重年）

日宗屋神社の「十七夜祭り」は2月11日、重年集会場（柳田）で行われた。日宗屋の神様がカブを持ち込み飢えを救ったという言い伝えに基づき、カブを中心に縁起物の料理が並ぶ。宴席では当番役の「当親」と、もてなしを受ける「オヤッサマ」の間で滑稽なやりとりが続き、笑いが絶えない。

この祭りの目玉は「松祝い」。宮総代や区長らが稲に見立てた松の木の周囲を巡り、枝を引く子どもたちの手を解き、松を立てる。今年も熱心に田の見回りをし、豊作になるようにと祈った。

▲宮総代や区長らが「松祝い」を行う。「目出度し」の声で松を立てると、宴席は「万歳楽土」と応じる。

子どもたちは田を荒らす「蟹の子」を表している。▶

◀簡略化されていた料理を復活。5段に重ねられたカブの煮物が特徴。上には細く切った豆腐が「井」型に載せられている。

恵方巻作り（まつなみキッズセンター）

◀切り分けられて、ずらりと並べられた太巻き

▼のりが破れないよう、掛け声にあわせて慎重に巻く

▲今年の恵方「東北東」を向いて食べる

「能登町で一番長いのり巻きを作ろう！」と題して2月1日、内浦福祉センターで太巻き作りが行われた。まつなみキッズセンターや「読み聞かせボランティアひまわり」、松波公民館、食生活改善推進員、JA内浦町婦人部、保護者などが企画、協力した。

参加者約80人は4つのグループに分かれ、JAから提供された米1斗をのりの上に敷き詰めて具材をのせ、掛け声を合図に一斉に巻いた。昨年の記録21メートルを大幅に更新する25メートルの太巻きが完成し、記録達成を喜んだ。一人一人に配られた太巻きの長さは約18センチ、直径約7センチ。今年の恵方とされる東北東を向いて食べる姿が見られた。

春のあえのこと（柳田植物公園・合鹿庵）

▲田には雪が積もっているため、玄関先の土間に田の神様を送る。「ニワ」と呼ばれる土間は、わら仕事などを行う仕事場でもある。

耕作開始に向けて「田の神様」を送る、春のあえのことが2月9日に行われた。柳田植物公園の合鹿庵には、県内外から約70人が集まり、中正道さん（上町）によるあえのことの実演を見守った。昨年12月5日に迎え入れ、家で休んでもらっていた田の神様を風呂や食事でもてなす。12月、迎えのあえのことの時期はブリだったが、2月はタラが旬。タラをふんだんに使った料理がずらりと並んだ。

まだこの時期は雪が深い。このため田の神様は田までは送らず、本格的な農作業の開始まで土間で過ごしてもらう。寒さはもうしばらく続くが、春への準備はすでに始まっている。

▼春の料理は「タラ」が主役。タラ汁のほか、「子つけ」や「なます」にも用いられる。「タラの子」がまぶされたなますは、稲の花が咲いている様子を表す。

▲今年も無事に米が収穫できるよう、田の神に祈る。